

## 「ヴァイマル期ドイツにおける戦死者記念の顕彰と追悼のはざま

### —マクデブルクを事例として—

#### 1-1. 本報告の目的

- ・戦死者記念や戦争記憶の在り方→戦争責任、国際的な歴史認識、国際政治と関わるアクチュアルな問題  
⇒戦争の「犠牲」の受け止め方について考えるための一素材を提供すること
- ・現代のドイツにおける戦争記憶…第二次世界大戦がメイン。反省するべきものとしての記憶→民主主義の立場の基礎(リユールップ)。「警告の碑 Mahnmal」という意味付け
- ・第二次世界大戦以前…ヴァイマル共和国における第一次世界大戦の戦争記憶、あるいは神話=戦争の美化、犠牲となった兵士の英雄化、敗北の正当化・克服のロジック  
⇒ヴァイマル期における平和主義・民主主義的/戦争の残酷さに目を向けた記念碑の存在

#### 「平和」と戦死者記念の関わり?

- ・戦争を正当化しない、戦争への警告という記憶の仕方: 戦争(という物理的暴力)への抑止の原動力になるか?
- ・戦争責任への取り組みと戦争記憶の在り方の相関関係: 被害と加害の歴史の和解への取り組みは、国際協調を深めるための文化的・政治的な基礎になり得るのではないか?
- ・反省としての戦争記憶や批判: 民主主義的な思考や制度の基礎

#### 1-2. 戦死者記念の研究への視角

##### 平和構築と歴史学

- ・ジェイ・ウィンター Jay Winter…大戦を思い起こすことは平和を希求するためであらねばならないと考え、戦争を美化することなく、戦争で死んだ人たちに哀悼の念を捧げるにはどうすればいいのかという課題に取り組んでいる(ウィンター、2014)
- ・歴史家はいかにコメモレーションすべきか?→コメモレーションに平和主義的な枠組みを与え、「戦争に魅力を見出す感情」を抑え込むことを説いている(小関、2014、p90)。

##### 追悼と顕彰

- ・戦死者記念の二つの方向性: 死者への追悼表現としての慰霊/ナショナリズムや戦争の美化と結びつき得る顕彰  
→どちらも切り離すことはできない(森村、2006年、pp.32-36)
  - 個々の記念碑や式典などにおいて、力点の置かれ方が異なるもの
  - 「犠牲の論理」…死者を悼む感情は常に顕彰、ひいては犠牲の正当化につながる危険性をはらむ(高橋哲哉)
  - ・森村によれば、こうした「戦争記憶をめぐる顕彰と追悼の関係」を知ることは、このようなカラクリを自覚することであり、また、追悼を目的として掲げるコメモレーションに込められた顕彰のメッセージを敏感に感じ取ることである。そうすることで「戦争の記憶」は戦争を正当化するための道具として利用される道を閉ざし、戦争を回避する自覚的な努力に結びつくのである(森村、p36)。
- ⇒平和主義的枠組みで考えるために: 顕彰と追悼のカテゴリーを二分して考えるのではなく、森村の述べるように顕彰のレトリックや追悼との関係にこそ注意する必要

⇒戦死者記念に関する双方向からの二つの取り組み：

- ・歴史学および平和学双方向からの取り組み
- ・哀悼に重点を置いた記念のあり方を模索の重要性を念頭に置きつつも、顕彰と追悼の関係やそれらのレトリックを認識

## 戦死者記念の多様性と多層性

多様性：記念碑や式典などにおけるさまざまな力点の置き方・方向性の違い

多層性：多様な立場や力学が一つのかたちや場に関わり、折り重なること→「マクデブルク榮譽の碑」を例に

## 2. ヴァイマル期ドイツにおける戦争記憶の様相

### 戦没者記念のあり方の変容

WW1～：第一次世界大戦は、テクノロジーを結集させた機械戦／前線と銃後の協力する総力戦／ふつうの人びとが兵士となる徴兵の3つの特徴によって戦死者の数はそれ以前よりも膨大なものになり、これまでの戦争体験と異なるものとしてヨーロッパへ衝撃を与えた（村上、p114）。より膨大な数の人が戦争で亡くなったことで身近な人を亡くした人が多くなり、一般の兵士が慰霊されるようになった。19世紀以来残っていた（もともとは傭兵や浮浪者、罪人だった）兵士への差別意識も第一次世界大戦を機になくなり、「戦死の民主化」が実現した。こうした総力戦の性格を典型的に表した「無名兵士の墓」がヨーロッパ各国に現れる（村上、p.p.117-118）。

### 第一次世界大戦の記念碑

記念碑のモチーフ：①古典主義的シンボル ②キリスト教的シンボル ③青年神話 ④戦場や戦闘に関する記憶

(Koselleck；モッセ；松本、2012)

……ドイツの戦争モニュメントはたいていの場合、戦争の現実を隠蔽し、戦争体験の神話を具現化した。それは、図像の細部のみならず、青年と勇らしさ、犠牲と戦友関係などの理想を投影した兵士イメージにまで貫徹した（モッセ、p107）

・ドイツは、「敗戦を信じていない」にもかかわらず「戦勝」を祝うことができなかった→「名誉の戦死」への崇拜、情熱（松本、2012）

→戦後ドイツにおける戦没者記念の重要性を高めた背景に、「ドイツ軍不敗神話」とのかかわり

### 敗北の神話化

①「ドイツ軍不敗神話」「戦場では不敗 Im Felde unbesiegt」

・少なくとも1918年9月ころから、つまり第一次世界大戦の敗北の直前からすでに見受けられる。

開戦当時12歳、ドイツの少女エルフリーデの日記：9月10日、母親の発言「負かされることなしにすべてを失う」

・「背後からの一突き伝説」（革命＝裏切りによる敗北）との神話複合の過程

②「戦争責任の欺瞞（虚偽）Kriegsschuldlüge」

・1919年6月28日、ヴェルサイユ条約の屈辱とともにドイツの「パブリック・メモリー」となった

・強制講和がドイツの思想状況・精神風土に及ぼした影響→「戦争責任問題 Kriegsschuldfrage」は、大国意識を持つドイツにとっては「矜持と名誉」に関わる重大な問題だった（石田；芝、2000、p17）

・ドイツだけに戦争責任があるとするヴェルサイユ条約を「戦争責任の欺瞞」として糾弾し、ヴェルサイユ体制に反対する運動は国民的な運動として集結<sup>1</sup> 2。

<sup>1</sup> 神話の広まりには、ドイツの外務省や歴史学者、ジャーナリズムの関与があった（ヴィンクラー；三宅、2006）

<sup>2</sup> 「戦争責任の欺瞞」を問題ととらえ、否定する試みも行われていた→5月、外務省が戦争責任キャンペーンを推進（石田）

### ③「背後からの一突き伝説（匕首伝説） Dolchstoßlegende」

- ・第一次世界大戦でのドイツの敗北を、ドイツ軍が戦場で負けたのではなく、銃後の裏切り、とくに社会主義者やユダヤ人による革命によるものとする。実際には、ドイツ全体では第一次大戦を通じてユダヤ系市民 10 万 명이前線で戦い、1 万 2000 名が戦死するという相応の犠牲（芝、2000、p24）。
- ・1916-17 年以降には、すでに「内政面での敵イメージやステレオタイプ」が成立していた（三宅、2006、p44）。
  - エルフリーデの日記：左翼を裏切り者、嘘つきとする母親などの発言
  - 前線で戦う兵士に対して「銃後の市民」が感じる後ろめたさのロジック＝内地に対する前線の優位
  - 「背後からの一突き」をもたらしたのは「国内」ではなくて「革命」だったとする見方は、すべての人の罪の意識を晴らすものだった（シヴェルブシュ、p238）
- ・ヴェルサイユ条約が、広まりつつあったこの伝説が広まる有効な動機になった（アイク、p210）
- ・1919 年 11 月、国会調査委員会での元陸軍参謀総長ヒンデンブルク元帥の証言を通して、「背後からの一突き伝説」が一般に広まったといわれている（三宅、2006、p26；シヴェルブシュ、p238）<sup>3</sup>。

☆ヴィンクラー：ヴェルサイユ条約の講和後に広まった二つの歴史伝説として、②戦争無罪伝説／③背後からの一突き伝説

→ヴェルサイユ条約修正の必要性の一点については、ドイツでは合意が形成されていた。

☆シヴェルブシュ：②が登場し、国民の慰めになった →敗北の汚名を塗り替えるために、③背後からの一突き伝説

☆三宅：開戦直後の熱狂的経験／①→②→③（戦後の戦争神話が次第にそれぞれを支えて形成）

→「〈神話複合〉となることでいっそう大きな歴史形成力を発揮」（三宅、2006、p24）

### 敗北の神話と戦没者記念の連関

これら神話の機能…敗戦の再解釈を通じて、敗北による不名誉の克服・正当化

+戦没者記念…ドイツの「名誉」に貢献するかたちで行われ、死や犠牲を可視化・理想化

=両輪となって複合的に第一次世界大戦に関する記憶やイメージを形成

## 3. 彫刻家バルラッハの「マグデブルク栄誉の碑」の分析

### 表現主義とバルラッハ

・エルンスト・バルラッハ Ernst Barlach(1870 年 1 月 2 日～1938 年 10 月 24 日)：表現主義の芸術家・彫刻家。第一次世界大戦勃発当初は熱烈な戦争支持者。1915、16 年には歩兵に志願したが、戦争の恐怖を体験し、反戦主義者として帰還した。

・表現主義 Expressionismus：20 世期初頭から、自然主義や印象主義に対抗してドイツを中心に起こった芸術運動。自らの感情を描き出したり、対象に何らかの意味を与えようとする表現手法。 \*⇔印象主義 Impressionismus

第一次世界大戦後のドイツでは芸術分野に留まらず、あらゆる分野でラディカルな潮流が生まれていた。ナチ期になると、ドイツ・ナショナリズムのイデオロギーに反する近代美術は「退廃芸術」とみなされ、破壊、弾圧の対象になった。

<sup>3</sup> 伝説の内容ではなく、この伝説そのものが「背後からの一突き」だったと指摘されるほどの威力をもった（三宅、2006、p24；コルプ、p60）。

## 「マクデブルク榮譽の碑」

・1929年、榮譽の碑 Das Magdeburger Ehrenmal@マクデブルク大聖堂、バルラッハ制作 [1934年撤去→48年再建] (松本、2012、p165)

★1930年…20年代の相対的安定期の終焉→議会制民主主義から大統領体制への転換 (ヴィンクラー)

### 受けた批判と込められた意味

・形式的には「榮譽の碑 Ehrenmal」として分類こそされるが、現在では「警告の碑 Mahnmal」とも評される (Laudan, 2016)  
・追悼に重きを置く記念碑への批判を分析→顕彰に込められた意味合いや、何が戦没者記念/批判者の立場にとって重要だと考えられていたのか検討できるのではないかと

-ナチからの批判：アルフレート・ローゼンベルク<sup>4</sup>「ソヴィエト兵のヘルメットを被った、小さな、半ば白痴を思わせる、人種もはっきりしない内向的な混血の変種が、応召した兵士たちを象徴しているとは！ 私は信じている。健全なる突撃隊員は誰でもが、自覚した芸術家同様、この件に関して同じ判断を下すであろう」

→バルラッハの彫刻は、兵士の勇気、名誉の戦死を讃えるよりは、兵士の苦悩を表現し、戦争そのものを告発するものになっていた。「戦意高揚」の役には立ちそうにもないそれらの記念碑は、ナチが政権をとると「反戦的」、「退廃芸術」として撤去されたり、破壊されたりした (松本、2006、p58)

-ナチの立場：人種主義、反マルクス主義的な批判 (松本、2012、p165)

-兵士として持つべき肉体的、および精神的・知的強さの欠損

⇐こう見えるように作られているのは、松本やLaudanからも評されているようにバルラッハの記念碑が持つ意味は顕彰だけではなく、追悼の意味が強く込められていたと考えられる。

### 時代の要請のなかで

・プロイセン：皇帝の命令によって、常設諮問委員会と「兵士の名誉のための助言センター Beratungsstellen für Kriegerehrungen」がプロイセン州に設置→戦士記念碑建設のための基準や原則には、「教育的なモデル」に対応する必要

・マクデブルク市：英雄的なドイツ兵が国家の栄光のために戦った場面をバルラッハに依頼

→それに対する応答としてのバルラッハの作品：「榮譽の碑」の形式のなかで、兵士の恐怖や死、絶望を表現

・マクデブルクという都市の政治的状況：右翼団体「鉄兜団」の拠点であり、右翼の牙城ともなっていた

→それゆえ、バルラッハの記念碑は戦争支持者から激しい批判を受け、ナチ時代には撤去される

・その名前と現在の評価が相対するものであることからわかるように、「マクデブルク榮譽の碑」は、最初から犠牲の「哀悼」のために依頼されたわけではなく、戦争記念碑が「顕彰」のために作られる時代の中で、「哀悼」の色が「比較的」強く込められたものである。

・(バルラッハに限らず主に表現主義の)多くの芸術家たちは、戦争を美化するだけの記念碑の基準に批判的 (Laudan, 2017)

-ブルーノ・タウト…1919年「Arbeitsrat für Kunst 芸術のための労働評議会」での要求：古いスタイルの「王、戦争、あるいは将軍の記念碑」が溶け合わされることによる「戦争の英雄化」を防ぐこと、また一方で、「戦争の恐怖と悲惨さ」を生かし続けること、そしてこれを建築と芸術を通じた生活全体の根本的改革と結びつけること

-アドルフ・ベーネ…「記念碑の設置」のかわりに「遺族への実際的な支援」を唱える

---

<sup>4</sup> 党機関紙『フェルクキッシャー・ベオバハター』の編集責任者にもなった古参のナチ党幹部

## 表現の意図と表現手法

・バルラッハが戦争を語るために用いたモチーフ：

-個人の人間の経験や、ふつうの兵士あるいは女性や家族の犠牲

-戦争での罪(悪感)や誤り、苦しみ、そして死に関する彼の深い狼狽 seine tiefe Betroffenheit über Schuld, Irrtum, Leiden und

Sterben im Krieg thematisieren (Laudan, 2017)

・戦争の悲惨さを戦没者記念碑 Gefallenendenkmäler に描いたほかの表現主義彫刻家:オットー・ディクス Otto Dix(1891-1969)、  
ヴィルヘルム・レームブルック Wilhelm Lehmbruck (1881-1919)、ケーテ・ゴルヴィッツ Käthe Kollwitz (1867-1945) ⇒表現主義という表現手法に注目できる

## 表現主義による戦争記念碑はなぜ戦争の悲惨さを描けたのか？

・絵画独自の特徴…「時間性」「造形的総合」⇔写真(河本、2011)

……絵画は瞬間的な表象ではなく、戦争体験を内面化するための時間を経たうえでの創作であり、単なる「記録」とは一線を画し、「解釈」によって「総合」されたものである。画家は、「真実は戦闘中にはない」(ウインダム・ルイス)との信念を抱き戦争を「内面的な現象」と捉えることによって(フェリックス・ヴァロットン)、写真が牽引する〈戦争〉ジャーナリズムとは一線を画した表現を志向するだろう。だからこそ、記憶が問題となり、戦争体験を反映した自己表象が重要な主題となる。「破壊を通してのみ存在する真の記憶」(クレイ)の表象をめぐる実践も、時を経て描かれる「記念碑」としての作品も、時間による経験の内面化と総合無くして実現するものではない。(小黒、2012)

→①戦争をモチーフとする芸術作品の特徴としての「時間による戦争経験の内面化」

②「造形的総合」(表現主義的な自身の感情を描いたり意味づけを施すもの。とくに戦争にネガティブなイメージを持った表現主義芸術家は、そのネガティブな感情を偽らずに表現しようとしたと言える)

③ヴァイマル期ドイツにおける政治、文化そして芸術における革新的状況

・ヴァイマル文化…敗戦や社会構造の変化により、ヴィルヘルム時代の価値観への信用低下。とくに1920年代の表現主義芸術は非常に「政治的」だったとも言われる

・前衛(アヴァンギャルド)…おもに芸術、文化、政治の分野における実験的、革新的な作品や人々のことを指す。もともとは軍事用語だったが、19世紀より政治において、また20世紀初頭より文化や芸術に転用された。

→もともとの軍事用語のように戦争体験をしたこと、またそれによって革新的な政治・文化状況がヴァイマル期に生まれていた

## 今後の課題

・表現主義作品の記念碑の社会的な位置を把握したい。

・右派や戦争支持者からの批判があったとしても、それは一部なのか、どのくらいの規模の論争だったのか。

・ヴァイマル共和国にあった平和主義、共和派などとのつながりが、芸術や文化のコミュニティとどのようなかわりがあったのか。

## 参考文献

- エーリッヒ・アイク（救仁郷繁 訳）『ワイマル共和国史 I 1917-1922』ペリかん社、1983 年。
- 石田勇治「ヴァイマル初期の戦争責任問題 —ドイツ外務省の対応を中心に—」日本国際政治学会 編『国際政治 96 号 1920 年代  
欧州の国際関係』有斐社、1991 年。
- 板橋拓己「ヴァイマル共和国 —「即興デモクラシー」のゆくえ」森井裕一 編『ドイツの歴史を知るための 50 章』明石書店、2016  
年。
- 今井宏昌『暴力の経験史 第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験 1918~1923 年』法律文化社、2016 年。
- ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラー（後藤俊明ほか訳）『自由と統一への長い道 I ドイツ近現代史 1789-1933』昭和堂、2008  
年。
- ジェイ・ウィンター（小関隆 訳）「破局を記念・追悼する —100 年後の第一次世界大戦—」『思想』（10 月号 100 年後の第一次  
世界大戦 —現代の起点）岩波書店、2014 年。
- 小黒昌文「〈書評〉第一次世界大戦と芸術：『「クラシック音楽」はいつ終わったのか 音楽史における第一次世界大戦の前後』葛  
藤する形態 第一次世界大戦と美術』『表象の傷 第一次世界大戦からみるフランス文学史』『人文学報』12 号、京都大学人文  
科学研究所、2012 年。
- 黒川「〈書評〉蔭山宏著『ワイマール文化とファシズム』」『史学雑誌』97 号、史学会、1988 年。
- 小関隆「第 4 世代の第一次世界大戦研究とその先」『思想』（10 月号 100 年後の第一次世界大戦 —現代の起点）岩波書店、2014  
年。
- 酒井隆史『暴力の哲学』河出書房新社、2016 年。
- 芝健介『ホロコースト』中央公論社、2008 年。
- 芝健介『ヒトラーのニュルンベルク 第三帝国の光と闇』吉川弘文館、2000 年。
- 原田昌博「1920 年代後半における鉄兜団の政治的急進化と「労働者問題」」『鳴門教育大学研究紀要』第 27 卷、鳴門教育大学、2012  
年。
- 藤田大誠「日本における慰霊・追悼・顕彰研究の現状と課題」國學院大學研究開発推進センター編『慰霊と顕彰の間 —近現代日  
本の戦死者観をめぐって—』錦正社、2008 年。
- ジョン・ホーン「第一次世界大戦とヨーロッパにおける戦後の暴力 1917-23 年 —「野蛮化」再考—」『思想』（10 月号 100 年後  
の第一次世界大戦 —現代の起点）岩波書店、2014 年。
- 松本彰「〈ヨーロッパの中のドイツ〉意識の歴史的展開」西洋史研究会 編『西洋史研究』新輯第 28 号、西洋史研究会、1999 年。
- 松本彰「ドイツにおける二つの世界大戦犠牲者の墓と記念碑」歴史科学協議会編『歴史評論』No.628、校倉書房、2006 年。
- 松本彰『記念碑に刻まれたドイツ』東京大学出版会、2012 年。
- 村上宏昭「英霊礼賛 戦死の神話化と戦争の享楽」伊藤純郎、山澤学編著『破壊と再生の歴史・人類学 —自然・災害・戦争の記  
憶から学ぶ』筑波大学出版会、2016 年。
- 三宅立「〈戦争の神話化〉〈戦争の記憶〉 —ドイツ少女の第一次世界大戦日記を手がかりに—」駿台史学会編『駿台史学』127 卷、  
駿台史学会、2006 年。
- 三宅立「第一次世界大戦とドイツ社会」若尾祐司、井上茂子編著『近代ドイツの歴史』ミネルヴァ書房、2005 年。
- ジョージ・L・モッセ（宮武実知子 訳）『英霊 創られた世界大戦の記憶』柏書房、2002 年。
- 森村敏己「歴史研究における視覚表象と集合的記憶」森村敏己 編『視覚表象と集合的記憶 —歴史・現在・戦争』旬報社、2006 年。
- Reinhart Koselleck, M. Jeismann (Hg.), *Der politische Totenkult: der Kriegerdenkmäler in moderne*, München, 1994.
- Ilona Laudan, *Ernst Barlach: das Denkmal des Krieges im Dom zu Magdeburg*, Verlag Jonas Stevics, 2017.